

オール電化・雨月物語

青柳碧人

キツカの契り

1.

レモネスがアカナを助けたのはほんの気まぐれだった。

四十八時間限定のトレジャーファイバーのチャンスに、できるだけアイテムと激レアの名字ソルジャーをゲットしたくて、ヴェネツィアステージに降り立った。編成は、東四柳ひがしよつやなぎと苦米地くまいち、それに嶋沢しまざわと名取なとりを二人ずつ。ヴェネツィアに来るのは初めてだが、狭い道での戦闘になりがちだという事前情報があり、強敵と鉢合はちあわせたときに逃げることを考えると、連れていくのは六人が限界だろうという判断だった。

運河沿いの道を歩きながら、足元のおぼつかない、巨体の苦米地を連れてきたことを軽く後悔したとき、橋の向こうに閃光せんこうが上がるのが見えた。

バトルが始まっている。

近づいていくと、バルの前の少しだけ広い空間でソルジャーたちが火花を散らしていた。プレイヤーは共に男性のAvatarだ。こちらに背中を向けているのは赤いジャケット。対するプレイヤーは、銀色の甲冑。

通常は他プレイヤー同士がバトルを始めると、他のプレイヤーからその二人は見えなくなる。だが、トレジャーフィーバーステージに限り、他プレイヤーどうしの戦闘に乱入することができるのだ。

加勢できるのは一プレイヤーにつき一人だけ。加勢したプレイヤーが勝利すれば相手の落としたアイテムと勝利ボーナスが折半でもらえるが、負ければ相手に取られることになる。

見たところ、甲冑のほうが圧倒的に優勢だった。半井、勝賀瀬、鹿子木と、激レアの名字ソルジャーが武器をふるっている。対するジャケットのほうは、鬼頭が応戦しているが、津村、魚住、永瀬と、他のソルジャーは中堅どころだった。

甲冑のほうに加勢すれば勝利するのは目に見えている。そうするのがセオリーだろう。

だが……

【JOIN!】

意思表示をすると、機械音声が響き渡った。

レモネスは、赤ジャケット男の隣に立っていた。

「よろしくお願いします」

「あ、よろしくお願いします」

戸惑ったような男性の音声が耳に届いた。レモネスの、バスケットボール選手のアバターに驚いているのかもしれないなかった。

【いざっ！】

敵方の鹿子木が大鎌を振り下ろしてくる。瞬間、レモネスたちは緑のドームに覆われ、攻撃は弾き飛ばされた。東四柳がウィロウ・シールドを張ったのだ。

甲冑の動きに焦りが見えた。あせ楽勝の相手だと思っていたのだろう。しかし、向こうのほうが強いのに変わりはない。それだけに倒せば優良アイテムが期待できる。そのとき、視界の左端に何か動くものが見えた。運河の上に細いゴンドラが流れてきたのだ。ヴェネツィアステージならではの演出だった。

「乗ろう」

「え？」

「早く！」

赤ジャケットを促し、舟の上に飛び降りる。それぞれのソルジャーたちもついてくる。ざぶんと勝賀瀬が水柱を上げた。やはり敵は追ってくるつもりだ。

一つ、勝機のある作戦を思いついた。実行するには、前方の橋をく

ぐるまでは敵から逃げ切りたいところだ。

ゴンドラはだんだん速度を上げていく。赤ジャケットの率いていたソルジャーたちが水中に入って泳ぎながらゴンドラを押しているのだ。津村、魚住、永瀬……攻撃力は高くないが水中で有用な名字たちだ。一気に引き離し、橋を二つこえたところでゴンドラを止め、相手を迎え撃つことにした。

水しぶきを上げながら追いかけてくる甲冑のソルジャーたち。橋をくぐりぬけたところで、激レア三人衆が武器を振り上げた、その刹那、通り過ぎたばかりの橋から黒い塊かたまりが二つ落ちてくる。

「えっ？」

相手の口から戸惑いの声が漏れ出た。直後、その甲冑に赤い火花が散った。

苦米地はフィールド上の人工壁に溶け込むことができる。橋を潜り抜けるとき、レモネスは橋の下に苦米地を忍ばせておいたのだった。苦米地に装備させているのは、金属にクリティカルなダメージを与えることができる斧アックスだ。

空中に現れた相手の体力ゲージが激減した。とっさに動きの速い名取と鳴沢をけしかける。津村、魚住、永瀬も、攻撃力は弱いがさすがに得意な水中の中で攻撃をひよいひよい避ける。

そのときだった。

グガガガガッ——！

白い光が放たれ、一気にキャラクターが四散する。半井が自爆したのだった。巻き込まれた弱いキャラクターたちは一気に消えた。

鬼頭と東四柳は瀕死^{ひんし}、レモネスも赤ジャケットの体力ももう40を切っている。

もう一気に仕留めるしかない。攻撃を仕掛けてこようとする勝賀瀬と鹿子木のあいだをすばやく駆け抜けると、赤ジャケットも同じことを考えていたようだった。

それぞれの武器を水平にして、よろついている甲冑の首に一気に打ち付ける。

“あああっ！”

体力ゲージがゼロになるとともに、甲冑の首は吹っ飛んだ。がらがらながらんと鐘^{かね}の音が鳴り響き、「Victory」の文字が宙に踊る。さつきまで敵のキャラクターたちがいた運河の水の上に、アイテムと金貨が散らばっていた。

終わった。

「……ありがとう」

アイテムを回収していると、赤ジャケットが話しかけてきた。

「でもどうして、俺に加勢したんだ？ 向こうに加勢したほうが確

実に勝てただろう？」

俺、という一人称を使っていることからやはり男だろうと思う。
レモネスは面倒なので変声機能は使っていないが、アカナも同じなのだろう。

「さあ……強いやつに立ち向かってみたかったからかな」

嘘だった。コンピュータ相手なら確実に勝てる相手にしか立ち向かわない。アバターの向こうに現実の人間がいると考えたとき、弱い者を叩く側になりたくないのかもしれないなかった。

「強いやつを倒したほうが、いいアイテムをもらえるしな」

「たしかに……おっ、これは」

と赤ジャケットが言ったそのときだった。

ゆうすけ
「佑介！」

ぐいっと、右腕が引つ張られる。現実の感覚だ。

「あんたまたゲームやってるの？ いい加減にしなさい」

まずい。強制終了されたらデータが消える恐れがある。

「ちよっと待ってくれよ！」

まぶた
瞼をつむると、世界各都市の現実の時間が表示される。

【TOKYO 03:05 A.M.】

ずいぶん、やりすぎたようだ。

「すまない。セーブして落ちなければ」

「あとでメッセージを送っていいかな。今度は中央広場で会おうよ」

「わかった」

BOMで知り合った相手とは原則交流をしないことにしているが、なぜかそのときは素直に応じた。スタートパネルを表示させ、オートセーブが効いていることを確認して【離脱】を選択。視界全体が白くなり、「K i k k a」の文字が見えたあとで、ゴーグルを外した。

母親が鬼の形相で顔を覗いていた。

「あんたね、こんな夜中までゲームばっかやってたら、取り上げるよ」

六畳の、自分の部屋。

「……わかった。もう寝るよ」

レモネスは、一介の高校生、長谷部祐介に戻っていた。

2.

薄汚れたプラスチックの蓋を開くと、紙くずやジュースのパックに紛れてランチボックスが沈んでいる。手を差し入れてそれを引き張り出すと、ぼろりと米飯の塊が落ちていった。卵焼きやひじきの煮物、魚のかば焼きなどももう、ゴミになっている。

顔を上げると、教室のドアにさつと二、三人のクラスメイトが引っ込むのが見えた。くすくすと、笑い声が聞こえる。

三時限目と四時限目のあいだの休み時間、トイレに行っているあいだのことだろう、と佑介は思った。机の脇に引っ掛けておいたカバンの中からやつらはランチボックスを引っ張り出し、廊下に出て、わざわざ蓋をあけてゴミ箱の中にぶちまけたのだ。

すぐ後ろを、二人連れの女子が歩いていく。祐介の置かれた状況を横目で察したのだろう、こそこそと何かをしゃべりながら立ち去っていく。他の生徒たちもまた一緒だ。

みじめだという気持ちなど初めからない。高校生活など、ただ無色透明な時間の中を黙々と歩いているようなものだった。

「もったいないなあ」

右耳のすぐ近くで声が出て、振り返った。ショートカットの女子生徒が、ゴミ箱の中をのぞいていた。

「ずいぶん古典的ないじめられ方をしてるね、長谷部」

すぎもりるい
杉森瑠衣という名のクラスメイト。この夏に引退するまで、陸上部の短距離走のエースだった。鼻筋が通っていてボーイッシュな彼女は、男女ともに人気が高い。陰気で抵抗しないイジメ対象の佑介とは格が違うはずだが、なぜか、折に触れて話しかけてくるのだった。

「気を落とすなよ」

ぽん、と馴れ馴れしく肩に手を置いてくる。

「……どうせ、ほとんど食べない」

ランチボックスの蓋を拾い上げながら答えた。

「そんなこと言うなよ、作ってくれたお母さんが悲しむぞ。それか、お父さんだったりして」

「親父はいない。うちは離婚して片親だ」

気まづくさせようと思って、あえて事実を言った。だが「ほんとかよ」と杉森はなぜか嬉しそうだ。

「うちもそうなんだ。どうしようもない父親のくせに私を引き取りたがったから、お母さんは私を連れて逃げた」

冗談かと思つたが、言葉尻に寂しさのようなものを感じた。事実か。だとしてもどうでもいい。目をそらしたが、

「私のパン、半分食べるか？」

性懲りもなく彼女は、袋入りのレーズンパンを差し出してくる。

佑介は何も言わず、教室に戻っていく。

「レーズンは嫌いだったか？」

杉森はついてきた。教卓のあたりで、犯人らしき三人の男子生徒がこちらを見ている。好奇と嫉妬しつとの綺交ないまぜになったような視線――。

「食べないと午後まで持たないぞ。食べ盛りの十七歳男子だろ」

「先月、十八歳になった」

「おー、ハッピーバースデー」

「俺と話していると、無視されるぞ」

「別にいい。私が誰と話すかは、私が決める」

だったらこつちから無視だ。ランチボックスをカバンに押し込み、教室を出る。購買部の前には人だかりができていた。

「これだけ並んでたら、もうショボいのしかないな」

杉森が背後で言った。新たなレーズンパンが、祐介の眼前に突きつけられた。

「なんでついてくるんだよ？」

「聞きたいことがあるんだ」

「なんだと？」

「レーズンパンやるから、ついてこい」

誰が……と言いかけたところで、祐介の腹が鳴った。

「体は正直だな」

杉森は笑った。舌打ちをしながら、祐介は彼女についていく。

連れてこられたのは、屋上だった。誰もおらず、上空を飛んでいくジャンボジェットだけが二人を見ているようだった。

「長谷部、あんた、K i k k aに詳しいだろ」

K i k k a——五年前に発表されるなり、世界中で爆発的にユーザーを増やしていった、V R専用のメタバースプラットフォームである。ネットに繋がっているV R機器さえあれば、誰でも無料でア

カウントを作成することができる。ビジネス会議やオンラインゲームなど従来のVRサービスはもちろんのこと、K i k k a 内で店舗を構えたり、コンサートを開いたり、その有用性は無限大だ。今年の一月には、カナダの政府がK i k k a 内でのみ受講可能な大学を開校することを発表し、世界中から入学希望者が殺到しているという。

長時間のVRゴーグルの装着が人体に与える影響など、医療的な観点から危険が指摘されているものの、昨年の秋に日米首脳会議がK i k k a 内で開かれたことに後押しを受け、ユーザーはさらに増え続けている。

佑介もまた、高校入学とともにK i k k a にユーザー登録した。もつとも、その用途はオンラインゲームに限られている。

「別に。人並みだ」

レーズンパンを口にしながら、祐介は答えた。

「嘘だね。深夜までゲームやってるって顔してる。さしずめ、B O M だな？」

凶星を突かれ、返答に時間がかかった。

正式名称を「Battle of MYOJI」——もう十年以上前に家庭ゲーム機用ソフトとしてリリースされたゲームだ。プレイヤーは「名詞ソルジャー」という兵士を集め、バトルをし、アイテムや新たな「名

字ソルジャー」をゲットしてストーリーを進めたり、バトルランクをあげたりする。「名字ソルジャー」は実際に日本に存在する名字がそのままキャラクター名になっており、その珍しさによって強さや属性が変わる。佐藤、鈴木、高橋など一撃でやられてしまうソルジャーばかりを多量に持ってもしょうがなく、てしがわら 勅使河原、きとら 記虎、わらび 巖いしなど強力なソルジャーを集め、敵の属性を考慮しながら編成を変えたりして楽しむのだ。

日本でテレビゲーム版がリリースされたときにはあまり受けなかったが、三年前にK i k k aバージョンがリリースされると、日本人の名字の多彩さと漢字の造形のクールさが受け、アメリカで火が付いた。やがてブームは世界中に広がっていき、週ごとに集計されるK i k k aゲームランキングではトップテンに入り続けている。

「やっぱりB O Mかー」

あっけらかんと笑う杉森に、祐介は嫌な予感を覚える。

「お前、ゲーム内で俺にコンタクトを取ろうっていうんじゃないだろうな？」

そんなのは絶対にごめんだった。B O Mは祐介にとっての聖域。

この世界の人間と関わりあいたくない。

「心配するな、私はゲームはやらない」

杉森は笑った。

「私はK i k k aの英語の勉強会に入っていて、ほとんどそれだけでしかVRを使わない。現実とメタバースがごちゃごちゃになったら嫌だからな」

はは、と笑い、すぐに杉森は真剣な顔になる。

「最近、K i k k aに入ると、頭の上に魔女が飛んでるんだ。あ、いや、魔女かどうかわからないな、箒ほうきに乗ってないから」

「何を言ってるんだ？」

「わからないからあんたに相談してるんだ。魔女のやつ飛びながらわんわん泣いているし、たまに目の前にばさっと降りてきて気が散るんだよ。ところが、どうやら私以外のアバターには見えていないらしい」

少し、興味がわいた。

「ウイルスの類たぐいかな」

「だと思っ。けど、検索しても対処療法が出てこない。私だけにしか見えないなんてそんなの妖怪だよな、ほんと」

「何か原因は考えられるか？」

「先月、海外のいかわしい動画を見たんだ」

こともなげに杉森が言うので、パンをふき出しそうになる。

「VRのエロはリアルですごかったぞ。……あ、このこと絶対に人に言うなよ」

「普通は、本題に入る前に念を押すものだ」

「そうか。倒置法になってしまった」

「違う。……なんで俺に言うんだよ」

「他のやつに相談したら広まるだろ？ 友だちのいないあんたなら
広まりようがない」

軽く馬鹿ばかにされたようだが、納得のいく理由ではあつた。

「残念だが、そのウイルスの駆除法を俺は知らない」

「調べてくれないか。レーズンパンの返礼として」

お前が押し付けてきたんだろと心の中で毒づく。しかし、無下むげにするわけにはいかなかった。K i k k a上のウイルスは今後、増えていくだろう。これを機に調べてみてもいいかもしれない。

「わかった、できる限りのことはする」

「そうか、ありがとう。ところで」

と杉森はすぐに話題を変えた。

「長谷部、あんた、模試の成績、落ちてるだろ。こないだ、見えちゃったんだよ、あんたの診断表」

先月、学校で受けた業者の模試のことだとすぐにわかった。

「第一志望の大学、E判定だったろ。ちゃんと勉強しないと受かんないぞ」

三年生になってから、成績は下降の一途をたどっている。新しい

学習内容が増えるのにくわえ、一年、二年の内容が頭から抜けていたのだった。ストレスから夜中のゲームの時間が増えていく。さらに成績が落ちていく。面白いぐらいの悪循環だった。

「私も同じ大学を志望校にしてるんだ。受験が終わるまでの辛抱なんだから、きちんとやるべきことは……」

杉森に背を向け、校舎の中へと向かう。

「おい、まだ話の途中だぞ」

……受験などどうでもいい。佑介はいつしか、捨て鉢な気持ちになっただけ。

3.

レモネスが K i k k a のコミュニケーション広場でアカナと再会したのは、ヴェネツィアステージの夜から三日後のことだった。初めて入るペアモードの世界。ゴビ砂漠フィールドで対戦したのは英語をしゃべる二人組だった。

臭気を操る蕪原にらばらを倒すのに手こずったが、先日甲冑を倒したときにゲットした七五三掛しめかけの活躍により、襲い掛かってくる数十の大竹おおたけをぐるりと縄で束ね、一気に倒すことができた。

「初めて来たけど、ペアモードも面白いね」

新たな相手を求めて砂漠を歩きはじめたとき、アカナが話しかけてきた。

「レモネスはけっこう、ペアモードは体験しているのか？」

「いや、俺も初めてだ」

友人がいないのはゲーム内でも一緒だった。

「来年の五月、ペアモードの世界大会が開かれるって知ってた？」

「ああ、なんか広告を見た気がする。でも、ペアモードには興味なかったから」

「俺たちで出ないか」

あっさりと、アカナは提案してきた。

「俺たちまだ、知り合って二回目だけ」

「二回目でも、信頼できる相手っていうのはわかるものだよ。俺は君になら安心して、背中を預けられる」

アカナは戦闘開始後、早々に強いソルジャーを前に出す戦い方をする。相手によっては効果的だが、慎重派のレモネスからすれば危なっかしく感じるところも多い。だが、どこにフォローを入れればいいのかもすぐにわかった。たしかに相性はいいかもしれない。「しかし、五月となると先すぎて、何をしているかわからないからな」

「転勤とか？」

アカナは当然のように訊ねてきた。

「あ、いや、そうじゃなくて」秘密にしておくはずが、自然と口をついて出た。「実は俺、学生なんだ」

「えっ？」

アカナは驚いた様子だった。

「大学生かな？」

「高校生。三年生だよ」

「そうだったのか。落ち着いているから社会人かと思っていた。俺は大学院生なんだ」

だいぶ年上だということがわかった。敬語に直したほうがいいだろうかと思つてやめた。実年齢から離れて楽しめるのはメタバース以前からのソーシャルゲームの美点だ。

「三年生っていうことは受験か。……あ、こういう話はしないほうがいいかな」

「いや。いいんだ。そう、受験だよ。だけど最近勉強に身が入らなくて志望校に合格できるかどうか。特に、数学や物理についていけなくなっているんだ」

「ふーん。理系なんだね」

「一応、そのつもりだ」

「予備校は？」

「行っているけど、効果が上がっているとはいいたい」

アカナは少し沈黙した。レモネスは——長谷部佑介の頭で考えていた。

「なあアカナ、勉強を教えてもらうことはできるだろうか？」

「え、ああ……俺にできることなら」

同じことを考えていた、というようなニュアンスに取れた。

「じゃあ、BOMを出て、フリー会議室にでも行こうか」

すぐにBOMを出て、K i k k aのフリー会議室に入る。

アカナの説明は、学校の教師よりも予備校の講師よりもずっとわかりやすかった。今まで曖昧あいまいに覚えてきた公式なども、きちんと意味から理解することができた。

「アカナ、ありがとう。なんだかやる気が出てきた」

勉強に対する素直な気持ちきもちが蘇よみがえってきたようだった。

「そうか、それはよかった。ところでもし、レモネスが大学に合格出来たら……出ないか、五月にペアの大会」

目標。現実世界で見失っていたその言葉が、頭をよぎった。

4.

佑介が通う高校は世間で言う進学校のため、三年生は毎月二回、

校内模試が催される。

模試の結果が返されるホームルームはいつも、教室に独特の緊張感が立ち込める。成績など、生徒用の端末たんまつに送ればすむことなのに、クラスの担任はなぜか、一人ずつ教卓の前に呼びつけてプリントアウトした紙を手渡しする形式にこだわっている。

紙を受け取った者の表情は様々だ。人目をはばからずガッツポーズをする者、目も当てられないくらいに嘆なげく者。嬉しさを隠しているのか、焦燥しょうそうを隠しているのか、岩のように表情を固めたまま席に戻る者。——どうでもよかった。

佑介は成績表を受け取り、席に座って開いた。

「おっ、数学すごいじゃん」

振り返ると、杉森がニヤニヤしていた。彼女は物理化学が得意であることは、噂うわさで知っていた。数学もお手の物なのだろう。

「私と同じくらいの点数だ。一瞬見ただけだけど、物理も上がったな」

「つきまとうなって言ってるだろ」

大声をあげると、クラス中の白けた目が佑介に突き刺さった。いつも佑介の弁当を捨てるグループのリーダー格の男子生徒が、盛大な舌打ちをする。お前が教室でしゃべるんじゃないやねえと言わんばかりの目だった。

ホームルームが終わるのを待ち、すぐに廊下へ出て昇降口に向かう。

「長谷部。成績が上がったのには何か秘密があるな」

やっぱり杉森はついてきた。黙ったまま外履きに履き替える。

「教えるよ。どんな勉強をしてるんだ？」

校門までの道でも、杉森はしつこく訊いてきた。

「あのなあ、どうしてそんなに俺につきまとう？」

「お礼がしたいからだよ」

杉森は言った。

「例の魔女。長谷部のおかげで、いなくなった」

言うかどうか迷ったが、変に嘘をつけば余計に面倒なことになると思い、白状することにした。

「あれ、俺の知恵じゃないんだ。K i k k aで出会った大学院生に聞いたんだよ」

アカナに相談したのは、初めて会議室で勉強を教わったときだった。彼はそのウイルスのことを知っていた。

「アイルランドで開発された悪質なウイルスだな。たしか、バンシ―とかいう名前の」

特定のサイトにアクセスした端末にのみ感染するために、世界では全然知られておらず、ワクチン開発も進んでいないとのことだった。

た。

「ちょっと、詳しいやつに対処方法を訊いてみる」

そう言い残して別れた次の夜の夜にはすでに、アカナはワクチンコードを手に入れていた。K i k k aにはユーザーが誰でも使える「ロッカー」という機能がある。三日間限定であらゆるデータを保管でき、パスワードさえあれば誰でも中身を引き出せるというものだ。佑介は校内模試の初日に、杉森にワクチンコードの入ったロッカーのパスワードを教えていたのだった。

「そういうわけだから札なんて必要ない」

「いや、そういうわけにはいかないよ。助かっちゃったんだからね」と、彼女はタブレット端末を見せてきた。「eチケット」の文字とともに二次元コードが映し出されていた。

『犬と私と無限級教』、チケットが偶然、二人分あるけど、興味あるか？」

タイトルぐらいは知っている。公開中のアニメ映画だ。

「映画には興味がない」

「興味がなくても、タダなら行ってみてもいいだろ？」

雪解け水のように透き通った瞳で、杉森は佑介の顔を覗き込んでいる。

「……いや、行かない」

「なんでだよ！ 私はC組の宗田そうたからの誘いも断って、あんと一緒に
行こうっていうんだぞ」

学年で知らない者のいない花形の男子生徒よりなぜ自分のほうが
いいのか、理解に苦しんだ。

「じゃあこうしよう」杉森は勝手に提案してくる。「来月の校内模試
で私の成績があんたよりよかったら、二人で映画に行く」

「受験生だぞ。映画になんて行く時間……」

「あるんだよ！ 長谷部も私も、十八歳なんだから！」

よくわからない理屈だった。だがこのまま付きまとわれるのはう
つとうしい。

「わかったよ」

杉森の表情は、ぱあつと晴れ上がった。

「絶対だぞ、約束だからな！」

ああ、と彼女に背を向け、佑介は家路についた。

帰宅し、母親に成績表を見せると、顔が明るくなった。だがすぐに

その目に疑念が光った。

「佑介あんた、カンニングしたでしょ！」

「なんだと？」

「だって、予備校に行ってもろくすっぽ勉強しない、家に帰ってか
らすぐに部屋にこもって夜中までゲームしてるあんたがよ、こんな

にいい点数を取れるわけじゃないの」

「実力だよ」

「あんたねえ、私は馬鹿でも正直な子に育てたつもりよ。それが、その場その場でいいようにごまかして、嘘をついてまでいい点数を取ってほしいなんて思っていないわよ！」

「いい家庭教師に出会ったんだよ」

「家庭教師ってあんた、私はそんなお金出してないじゃないの！」
いくら説明してもらちが開かなかった。面倒なのでいっそのこと、アカナに会わせてやれと思った。

その日の深夜十一時、佑介は母親と一緒にKikka広場へ行った。

「あんたそんな見た目で……」

バスケットボール選手の恰好を見て、母親は言った。そういう母のAvatarは、紫色のカーディガンを着た、二十代そこそこの女性である。

「Kikkaにアクセスしたら見た目も変わる。そんなのは常識だ。それよりアカナの前では『佑介』って呼ぶなよ。俺も『メンタイコ』って呼ぶからな」

カーディガンの女性の頭の上に浮かぶ、アカウント名だった。三年前にVR機器を購入してKikkaへのアクセスが可能になった

とき、母親もアクセスしたことがあるのだった。アカウント名を何にしていいかわからないと言うので好きな食べ物の名前にでもしとくとアドバイスすると、母は「メンタイコ」とカタカナで登録した。恥ずかしそうな母親を引っ張り、いつもの会議室に入る。

「やあレモネス」

赤いジャケットのライオン青年が迎える。アカナはBOMでもどこでも、同じアバターを使う。

「アカナ。今日は母親を連れてきたんだ」

「初めまして」

にこやかに微笑むライオンの顔に向かい、メンタイコは「どうも」ときこちない挨拶を返す。

「アカナ、おかげで成績が上がったよ。だけどそれをカンニングだと疑われているんだ」

「レモネスはしっかりやっていますよ。少し見てください。……」

「じゃあレモネス、始めようか。確率分布の途中だったね」

レモネスは真剣にアカナの話を訊いて、数学を理解しようと努めた。説明はいつものようにすつと頭の中に入ってきて、また成績が上がるのがわかるようだった。アカナとのやりとりを見ているだけで、メンタイコの態度が変わっていくのがわかった。メタバースの中でも、母親の空気感というのは伝わるものだ。

「アカナさん、ありがとうございます」

三十分ばかりの勉強が終わると、メンタイコは深々と頭を下げた。

「こんなにもらって、謝礼を払わなければいけませんね」

「ああ、いいですよ」

「いえいえ、そういうわけには」

「本当にいいんです。その代わりに、僕のほうからお願いがあるんです。レモネス君と一緒にゲームすることを許してください」

レモネスとはBOMの中で出会ったことや、BOMではむしろ、自分のほうがレモネスに頼っているのだ、ということアカナは説明した。

「ええ……まあ、アカナさんがそれでいいならいいんですが、その、佑介……ではなくレモネスは受験生ですので」

「そこは僕も承知しています。ちゃんと節度を守ってプレイさせていただき、長時間やるようなら僕のほうから止めます」

「でも……」

「僕としてもレモネスにはぜひ合格してほしいんです。実は五月に僕たちのやっているBOMのペアモードの世界大会があるんです。

優勝チームには五百万ドルの賞金が出るんです」

「賞金が！」

「はい。まあ、優勝は無理でも、レモネスと一緒にならいいところまで

行けそうな気がするんです。せっかく友だちになったから、一緒に出たいんです。応援してもらえますね？」

「ええ、そりやもう」

メンタイコは、ぺこぺこ頭を下げた。

「アカナさんがいっしょなら却って安心ですね。どうかよろしくお願いします」

すっかりアカナのことを気に入ってるようだった。

5.

十一月、十二月と、校内模試は四回あり、受けるたびに佑介の成績は上がっていった。アカナが教えてくれる科目はもっぱら数学と物理だけだったが、その成績が上がることで、英語や現代文といった他の受験科目にも身が入るようになったのだった。

その都度、杉森は「何点だった？」と訊いてきたが、佑介のほうが点数は上回り続けた。

「あーあ、また負けた」

杉森は残念そうにため息をつき、

「しょうがない、玲子れいこと行くか」

と女友達を誘うのだった。

「お前、受験前に映画なんてずいぶん余裕だな」

佑介のほうからも、彼女に対して軽口を叩くようになっていた。

「余裕だわ。そんなに私のことが気になるか」

「なるわけないだろう」

佑介の成績はすでに志望校合格圏内に入り、杉森もそんなに成績が悪いわけではないので同じような状況だった。

「年が明けたら、大学入試共通テストだな」

十二月二十一日、年内最後の登校日、校門を出たところで追いついてきた杉森は言った。

「ああ」

「へマするなよ、長谷部。せつかくそこまで成績が上がったんだからな」

人差し指を鼻先に突き付けてくる杉森。その、吊り上がったような目を見ていたら、複雑な感情が湧き上がってきた。

学習の理解が進んだのは間違いなくアカナのおかげだ。だが成績が上がったのは……杉森に追われているというプレッシャーがあったからだろう。

認めるのは悔しいが、杉森の存在が佑介を合格圏内に押し上げてくれた一因とっていい。

「じゃあ、私、玲子と勉強するから」

と、遠くにいる友人のところへ向かおうとする杉森を、
「おい」

佑介は呼び止めた。

杉森は振り返り、不思議そうな顔をしている。

「共通テストの手ごたえがあつたら、一度行くな、映画」

「ん？」

ぱちりと瞬まばたきを一つすると、杉森は訊ねた。

「それは、私のことを誘ってるのか？」

「お前があまりにしつこいからだ」

「はっはー」

と笑いながら、杉森の頬は紅潮する。

「……いいよ。約束な」

「ああ」

ひらりと手を上げ、杉森は佑介に背を向けて走り出す。短距離走をやっていただけあって、そのフォームは美しかった。

6.

映画館を出た後、すぐに杉森はふふ、と白い息を吐きながら笑った。黒いニットに安物っぽいネックレスを合わせ、頬を刺すような

冬の冷気の中、コートは腕に抱えたままだった。学校とは違って化粧をしているが、慣れていないのか、右の頬がやけに白い。

「重い内容だったな」

「ああ」

事前情報を何も得ずに映画館の前で待ち合わせしたのが仇あたとなった。子供向けのアニメ映画と、特撮ものの他には、アメリカのコメディとSFアクションとホラー、ドイツの戦争映画しかなかった。SFアクションでもよかったが、それも子どもっぽい気がして、佑介と杉森は戦争映画を選択したのだった。

「ドイツ語だからヒアリングの練習にもならなかった」

「はっは、言ってる」

杉森は笑うと、

「カフェ的などころに入ろう」

と、不意に言ってきた。

「ああ……」

たぶん、男女二人で映画を観にいったあとは、それが自然なのだろうかと佑介は理解した。二人とも、世に言う受験生のように、四六時中勉強していなければ落ち着かないというタイプではなかった。

杉森も佑介と同じくコーヒーが苦手らしく、二人とも紅茶を頼んだ。注文が来るまでのあいだ、杉森は兵隊が吹き飛ばしシーンがシヨ

ツキングだったとか、非道な伍長ごちょうのふるまいがある意味かつこよかつたとか、一方的にしやべり続け、佑介は聞き役に徹した。紅茶が来てからは一転、杉森は沈黙した。紅茶の味を楽しんでいるという感じではなく、佑介が何か話しかけてくれるのを待っているようだった。

もとより自分から話すことはない。佑介は沈黙を通したが、あることが気になりはじめた。映画館では隣同士だからわからなかったが、こうして正面で見ると、やはり杉森の右の頬は白すぎる。何かを隠しているのか……と、顔をまじまじ見つめていて、気づいた。

「杉森お前、右の頬、腫れてないか？」

「えっ」

思わずといたように、杉森は頬を抑えた。

「あー、バレたか」

「どうしたんだ」

「昨日、駅で階段を踏み外して、顔から落ちたんだよ」

「大丈夫か」

「うん。病院に行くほどではない。心配はいらない」

この話はおしまいだ、と言わんばかりに笑顔を見せる。

「共通テストの結果が思った以上によく、浮かれてたのかもな。

長谷部、あんたもだろ。気をつけろよ」

「俺は大丈夫だ」

「本番の入試まであと二週間しかないんだからな。気を引き締めろよ」

「大丈夫だって言ってるだろ」

うんうんと、杉森は勝手に納得したようにうなずいた。

それからまたしばらく、沈黙が流れた。カップの紅茶があとわずかとなったところで、

「長谷部」

杉森が口を開いた。

「合格したらまた、行けるか、映画」

「ん？」

「今度はもっと面白いの、観よう。コメディとか、長谷部は嫌いかな」

「そんなことはないけど、杉森と同じところで笑う自信はない」

「長谷部」

笑うかと思ったが、杉森は思いのほか真剣なまなざしで、佑介の顔を見ていた。

「同じ大学に行けたら……」

何を言われるのか。佑介の中に一つの答えめいたものはあったが、それが何かを期待しているようで気恥ずかしかった。

「あつ、だめだこれは」

杉森は勝手に否定して首を振った。

「なんだよ」

「忘れる長谷部。少なくとも、合格するまでは」

杉森の首は赤くなっている。佑介は困惑したが、少なくとも、この寒い季節が終わったあとに、杉森と肩を並べて歩いている自分の姿を想像するのは苦ではなかった。心が弾むという言葉の方は幼稚だが、こうして二人で話をしているのは、悪くない。

杉森は目を伏せている。正直さの片鱗を先に見せてくれた彼女に、このまま後悔を抱えさせてはいけないと思った。

「杉森」

呼びかけると、彼女は目を上げた。

「一緒に、合格するぞ」

「……あ」

思いがけないことを言われたというような顔だった。そして彼女はすぐに、膝を叩いて相好を崩す。

「当たり前だろ。何を今さら……はっは。恥ずっ、なんだよ、長谷部。もう紅茶飲んだか？ じゃあ出よう。受験生だぞ、私たち」

カフェを出て、駅まで二人は黙った。

ホームまでは一緒だったが、乗る電車は逆方向だった。先に来た

のは、佑介の乗るほうだった。

「風邪ひくなよ」

「お前もな」

最後の会話を確認したかのように、ドアは閉まった。ホームに残って軽く手を振る杉森が、遠くなっていった。

その夜、もう一つの出来事が佑介——レモネスを待ち構えていた。

「突然だけど、今日が最後の授業になるよ」

いつもの会議室で、アカナはそう告げた。

「三月の末に大事な学会があつて、一つ論文を仕上げなきゃいけないかった。くわえて、教授の実験も手伝わなきゃいけなくなつたんだ」

「そうなのか、大変だな」

レモネスは素直に言った。

「受験直前なのにすまない」

「いや、謝るのは俺のほうだ、アカナ。忙しいのに俺に勉強を教えてくれていたんだな」

この二か月と少し、アカナとは二日と開けず K i k k a の中で会っていた。初めはゲームのほうがメインだったものの、レモネスの学習理解が進んでいないと見るやアカナは勉強のほうを優先させる

ようになった。まるで自分のことのように熱心だった。

「俺は本当に感謝している。アカナに出会わなければ受験勉強をすべて投げ出して、春からは何もない無気力な人間になっていたはずだ」

「大げさだよ」

アカナは笑った。音声変換ソフトを使ってるのかもしれないが、その声はいまやレモネスにとって、安らぎだった。

「レモネス。救われていたのは俺のほうなんだ」

「eスポーツのプロになるわけでもなし、俺なんてただの弱小ゲームーだよ」

「ゲームのことだけじゃない。……本当は、研究室で孤立してるんだ」

「え？」

「研究テーマが先輩と被っているんだけど、俺のほうがちよっとだけ、なんというか、実用性が高いんだ。教授にも俺のほう褒められ、そのぶん先輩からの風当たりは強い。学生はみんな先輩の味方をしていて、俺の居場所はない」

「そうなのか……」

「心配は無用だよ。俺はここで君と勉強をして、君とBOMをプレイして、生きる意欲を手にしてきたんだ。レモネス。君は僕の人生の

中でいちばんの友人だ」

メタバースの中だというのに、胸が熱くなった。K i k k a の中でアカナと過ごした時間が、自分にとっても大事だったのだと、素直に思えた。

「アカナ、俺もだ」

「負けない。俺は、自分の研究を必ず世に役立てるんだ」

はつきりとした意思に、レモネスも勇気づけられる。

「レモネス。四月の初めには必ずまた、K i k k a に戻ってくる。そのころには君も大学生だろ。そこからB O M のカンを取り戻して、五月の世界大会には一緒に出よう」

「もちろんだ」

「約束だよ。それまでのおよそ二か月間は、それぞれの大事なことに集中しよう」

「ああ、約束だ」

がっちりと、二つのアバターは握手を交わした。

7.

合格発表は、二月末の日曜日だった。

【おめでとうございます。】

あなたは本学の入学試験に合格しました。

今後は所定の入学手続きを行ってください。】

画面に映し出された文字を見たときには、喜びより先に「あっさりしたものだな」という感想が浮かんただけだった。

「佑介！ よかったじゃないの！」

はしゃいだのはむしろ、隣と一緒にタブレット画面を覗き込んでいた母親だった。ばしりと佑介の肩を叩き、

「予備校の先生にお礼に行かないや。あと、アカナさんと！」

「わかってるよ。ただ、アカナは今、会えないんだ」

アカナが研究でしばらくK i k k aにアクセスできないことを、母親にはそれまで告げていなかった。

「あら、そうだったの。せめてお礼くらい言えたらいいのに、相手がどこの誰かわからないなんてもどかしいものね」

わかっている。K i k k aのアカナだ。返事は期待せず、メッセージだけ送っておいた。

——合格したか？——杉森からのメッセージが来たのは、午前十時を回ったころだった。

——ああ。そっちは——

——合格だ。当たり前だ——

——おめでとう——

——そっちも、おめでとう——

メッセージのやりとりとなると、却ってぎこちなかった。だが佑介は杉森のメッセージを見たときに初めて、嬉しいと思えた。

気持ちは、月曜に会ってから確かめ合うことができるだろう。

杉森とは、会えなかった。

もとより、登校しているのはクラスの半分くらいだ。どこかの大学の受験日なのかもしれないし、授業内容はほとんど消化しており、よっぽどのことでない限り休んでも単位を落とすようなことはない。

授業中もそこかしこで談笑していたり、居眠りをしている連中ばかり。教師も勝手知ったるもので、注意などしなかった。

なぜ来ない？

杉森の机を見て、佑介は考えた。

風邪でもひいたか？ それとも、他の大学を受けているのか？
だとしたらどうして自分に言わないのか？

おかしくなったのは、午前中の授業が終わったときだった。

何を期待している？ なぜ他の大学を受けることをいちいち佑介に言わなければならないのか。そんなのは杉森の勝手だ。

いつしか杉森のことをわかっている気になっていた。ひどい思い上がりだった。

杉森はその週、一度も学校に来なかった。

翌週も杉森には会えなかった。

さらにその翌週、形だけの卒業式を終え、佑介の無味乾燥な高校生活は終わった。

杉森とはまったく連絡が取れなくなった。

食事をしていても、BOMをしていても、ベッドに身を投げ出して天井を見ている、杉森のことを思い出した。

——同じ大学に行けたら……

最後に会った日、カフェで彼女は言った。

——あつ、だめだこれは

——なんだよ

——忘れろ長谷部。少なくとも、合格するまでは

「……合格したぞ」

つぶやいた言葉は、無になった。

三月はあつという間にすぎ、佑介は大学生になった。

授業がはじまったが、やっていることは何も変わらなかった。

すなわち、家と学校との往復。キャンパスでは他の学生たちがサークルを探したり、資格取得の相談会に参加したりと活動的だが、佑介に声をかける者は誰もいない。

杉森の姿を探したが、いなかった。

合格自体が嘘だとは思えない。だがやはり、ワンランク上の大学に行ったのかもしれないと思った。約束をした手前、自分の前に現れるのが後ろめたかった——そう、結論付けた。

あの日感じた、わずかな胸の高鳴りなど、まぼろし幻だったのだ。杉森瑠衣という存在そのものもまた、幻だったと思えばいい。もともと人付き合いは苦手だ。どうでもよかった。

もう一つ、杉森とのこととは別に、むな虚しさを感じることがあった。アカナがK i k k aに戻ってこない。

四月になったら戻ってくるから待っていてくれと、彼は言った。だが待てども待てども、アカナからのメッセージは来なかった。

ヘアモードの世界大会には出場すると言っていた。必ず、必ず。

佑介は——レモネスは、アカナを信じていた。戻ってきたときのため、毎日BOMに入り、ソルジャー集めと戦闘技術向上に力を注ぎ続けた。

事実は、突然佑介の前に突き付けられた。

桜はあつという間に散り、四月はすぎ、五月二日になっていた。世界大会は二日後の深夜からBOMの世界大会が行われることになっていたので、昼間は寝て夜型のコンディションになっておきたかった。だがそういうときに限って体はいうことをきかず、大学へ出た。

「長谷部佑介！」

最寄り駅の改札を抜けたところで、呼び止められた。

肩を露出させたニットとミニスカートといういでたちに、誰だかわからなかった。

「お前は……比留間玲子か？」

長かった髪をショートの新茶髪にしている。化粧もさまになっていて、高校時代とは見違えるようだが面影はとどめていた。杉森といつも一緒にいた、玲子だった。だが彼女は、別の大学に進学したはずだった。

「長谷部……会えた」

よろめくように佑介に近づいてくると、彼女はぼろぼろと涙をこぼした。

「どうしたんだよ」

「どうしたんだよじゃないよ。ニュース、見てないの？」

ニュースなど久しく見ていなかった。立っているのもやつとというような玲子の姿に、嫌な予感を覚えた。

「瑠衣が、瑠衣が……」

「杉森がどうしたんだ？」

「……死んじゃった」

足元がマシュマロになったようにぐらりとした。なんとか気を立て直し、同じく足元のおぼつかない玲子連れ、キャンパス内のベンチに座らせた。

「杉森が死んだって、どういうことだ？」

玲子はカバンからタブレットを出した。ニュースサイトが映し出される。【十八歳女性、実の父親に監禁され衰弱死】という見出しが目飛び込んできた。

「瑠衣、大学に合格した直後、お父さんに無理やり連れていかれたの……」

佑介と同じく杉森もまた、両親が離婚して母親と二人暮らしをしている。そこまでは聞いていた。だが玲子によれば、杉森の家庭事情はもう少し複雑だった。

別れた父親が、杉森を引き取りたがっていまだに家に現れていた

のだという。共通テストの直前にも現れ、両親の争いを止めようとした杉森は顔を殴られたらしい。佑介は、杉森の右ほおの腫れた痕^はを思い出していた^{あと}。

「瑠衣とお母さん、入試の直前になって夜逃げするように引越したんだけど、お父さんは瑠衣がこの大学を受けるの知ってたから、待ち伏せして無理やり車に引張りこんで、遠くに逃げたんだって」

「そんなことが……」

信じられなかった。

「だが杉森は合格発表の直後、メッセージをくれたぞ」

「私にもくれた。たぶん、心配させないためだと思う。お父さんのところから逃げて、何もなかったように卒業式を迎えて、大学生活をはじめつもりだったんだよ」

ところが実際はそうはいかなかった。杉森は父親に連れられていった先のアパートで、監禁生活を強^しいられた。近隣住民の通報により、四月三十日に警察によって発見・保護されたが、すっかり衰弱^{すいじやく}していた。そして、運ばれた先の病院で息を引き取った。逮捕された父親は容疑を否認しているが、暴行もあったようだ——と記事には書かれていた。

佑介は歯を食いしばった。体全体が氷漬けになったように寒くなった。

悲しみ。怒り。後悔。同情……すべてが綱交ぜになり、そのどれでもない感情だった。

なぜ、杉森に会いに行かなかった？ 学校に来なくなったなんて、卒業式にすら来なかったなんて、変だと思わなかったのか？ だが、行ってどうなった？ すでに杉森は連れ去られたあとだったんだ。でも、何か手がかりを得て杉森にたどりつけたかもしれない。救えたかもしれない。思い上がるな。お前なんかそんな資格はない。杉森の気持ちを過剰に期待しすぎていただけなんだお前は。

激しい混乱。だが、ひとつだけ確実なことがある。

「自分が許せなかった。今さらだっただけでわかってたけど何かしなきゃと思って、瑠衣のお母さんの所へ行ったの。そうしたら、瑠衣のパソコンを見せてくれて」

玲子はタブレットを操作した。テキストデータが現れる。

「瑠衣の日記だよ。どうしても長谷部に見せなきゃいけないと思って、朝からずっと、改札の前で待ってたんだ」

佑介は玲子からタブレットを受け取り、杉森の日記を読みはじめた。

眼を閉じると、いくつかのデジタル表示が現れる。

【TOKYO 11:53 P.M.】

あと七分で、BOMのペアモード世界大会のエントリーは閉め切られ、試合が始まる。黄色いレンガの敷かれた中央広場は、いつも通りの光景だった。

ストライプのスーツを決めた男がいる。ビキニ姿の女性がいる。UFOを三つ引き連れたロボットがいる。オーバーオールを着たダイオウグクムシがいる。でろりとしたゼリー状の生き物がある……。現実世界の自分を隠したアバターたちが、当たり前のように目の前を通り過ぎていく。

老人がよっこらせと花壇かだんのふちに腰かける。その花壇を埋め尽くしている花がすべて菊なのだとすることに、レモネスは改めて気づいた。K i k k a——菊花ということか。外の世界は五月が始まったばかりだというのに、この世界には季節感がない。

【TOKYO 11:55 P.M.】

エントリーまであと五分。自分はなぜここにいるのだろう、と思う。

アカナが来ないことはわかっているのに。

虚無から逃げたいのだろう、ともう一人の自分が言う。

ばかげたことだ。どこから逃げても虚無は虚無。剣道着姿のゾンビと、全身オムライスの食品サンプルでコーディネートした女が目の前でダンスを踊っているこれが、現実のわけではない。

はじめなのだ、と、まだ心の中に残っていたポジティブさの一滴が告げた。エントリーが終わるのをK i k k aの世界で見届け、すべてに決別する。

そのあとは？

——そのあとのことなど知るはずもない。今日がK i k k aにアクセスする最後の日になるかもしれない。

自分でない自分の姿で、この世界に居続けられたほうが幸せだった。現実ではない自分のつま先を見つめながら、数十秒、杉森のことを思い出していた。

ふと、顔を上げる。

有象無象のアバターたちの向こうから、走ってくる男がいる。

「……うそだろ」

赤いジャケット、短く刈り込んだ髪。

「レモネス、遅れてすまない」

アカナはレモネスの前で立ち止まると、申し訳なさそうに頭を下

げた。

【TOKYO 11:58 P.M.】

「ふうして……」

「どうしてって、約束だろ」アカナは微笑んだ。「あと二分でエントリー打ち切りだ。急ごう」

「いや」

「早く。……もちろん、ランクインなんて夢だろうけれど、二人で出場することに意義があるから」

「違う！」

レモネスは叫んだ。

「……お前は、死んだだろ？」

アカナの顔から笑みが消えた。

「父親に殺されたんだ」

午前中に玲子に見せてもらったテキストデータは、杉森がK i k k aを使っていた記録だった。

杉森は、好きな茜色にちなんで「AKANE」にしようとしたらアルファベットを打ち間違えて「AKANA」と登録され、面倒なのでそのまま使うことにしたらしい。初めは趣味の手芸と、英会話のサークル室に出入りする程度だったが、あるとき気まぐれでBOMというゲームをやってみた。すぐにその世界観に飲まれ、勉強の傍らかたわ、

少しずつプレイするようになった。ただ、何となく気恥ずかしくて男のアバターに変えて変声機能で声も男にした。しゃべり方はもともと男っぽいと言われる。ゲーム内で会ったプレイヤーもみな、アカナのことを男と思っているようだった。

九月のある日、初めて参加したトレジャーチャンスで、レモネスというプレイヤーと出会った。自分を助けるスキルの鮮やかさもさることながら、惹かれたのはその声だった。どうも、クラスメイトの長谷部佑介の気がする。話してみれば、高校三年生で、勉強に身が入らないという。その口調が、長谷部そのものだった。

杉森は、かまをかけてみることにした。

学校で話しかけたとき、BOMをやっているかどうか、探りを入れてみた。やっている様子だったので、ありもしないウイルスに付きまとわれていると相談をした。

次にK i k k aの中で会ったとき、大学院生を装ってそれとなくレモネスに勉強を教え始めた。すると彼のほうから、学校の知り合いがK i k k aでウイルスに感染していると言い出した。頭上で泣きわめく魔女……杉森のうそっぱちを、レモネスはそのまま伝えていた。

ワクチンコードをロッカーに入れたと告げ、パスワードを教えた。すべて、自作自演だった。

校内模試で勝ったら、映画に行くという約束を取り付けた。余裕で勝てるはずだったのに、教え子のはずの佑介のほう点数が取れるようになった。

佑介のほうから映画に誘ってくれたのは本当に嬉しかった。

好きだ。だけど受験までこの気持ちは抑えなければならない。

K i k k aの中でさえも、抑えるのはつらい。だから学会だと嘘について、しばらくレモネスの前からも消えよう——

——その記述で、日記は終わっていた。

「バレたか」

今、久しぶりに目の前に現れたアカナは、頭を掻いている。それほど、恥ずかしそうには見えなかった。

やっぱり——と言いかけてレモネスは首を振る。

「違う。お前は……誰なんだ？」

「だから、杉森瑠衣だって」

あっけらかんと、アカナは答えた。

「嘘をつけ。杉森は……死んだんだ。ここに来られるはずがない」

「だって、約束したじゃないか」

「でも」

しかたないな、とアカナは右手を自分の顔の前にかざした。まるで

で金属が解けるように、そのアバターがぐにやりと歪む。周囲の有象無象のアバターたちは誰も、その異常さに気づく様子もない。

「これで、わかったか？」

両手を広げ、彼女はにこりと笑った。声も体型も、杉森瑠衣そのものだった。

「どうして……」

「あんたもだよ」

自分の両手と体を見る。いつものバスケットボール選手の手足ではなく、高校の制服姿だった。

「約束だから来た。それだけだ。でも……」

と杉森は飛行船を見上げた。

【TOKYO 0 : 03 A.M.】

「もう、間に合わないな」

「杉森……」

「ん？」

「会いたかった」

生まれて初めて、真っ白な気持ちを吐き出した気がした。杉森は嬉しそうに笑った。

「ありがとう。私も、世界大会の出場が終わったら言うつもりだったんだ」

「何を？」

「長谷部。私は、あんたのことが好きだ」

はっ、と息を吐き、杉森は続けた。

「だけどそれは、レモネスとアカナの間の男の友情的なやつじやなくて、その……」

ここへきて戸惑う彼女の姿が、いじらしかった。佑介は彼女を抱きしめた。

「長谷部、お前……」

「同じ気持ちだ、杉森。もう離したくない」

全身が、全精神が、杉森瑠衣を欲していた。

「ありがとう」

彼女の背中から肩に手を移す。杉森の瞳が、すぐそばにある。杉森は目を閉じた。

佑介もまた、瞼を閉じる。英字と数字がチカチカと赤く明滅めいめつしている。

【TOKYO 0 : 05 A.M.】

【NEW YORK 11:05 A.M.】

【PARIS 05:05 P.M.】

【NEW DELHI 08:35 P.M.】

【BUENOS AIRES 00:05 P.M.】

【SYDNEY 01:05 A.M.】

星のように瞬^{またた}く、現実世界の時刻たち——馬鹿を言うな。
唇に愛しい人の体温を感じながら、佑介は確信した。
現実^まは、K i k k a にしかない。

(終)